

梶田叡一著「教師力再興－優れた教師に満ち満ちた学校に」教育改革選書No. 2、明治図書出版、2010年6月刊を読む(4)

開示悟入の教育のために(4)

示す

1. (1)次に、効果的に「示す」ということについて考えなくてはなりません。
(2)「示す」とは、きちんと分からせること、できるようにさせること、覚えさせることに他なりません。
2. (1)体系的に一つひとつ学習を積み上げていこうとするならば、ポイントになる点をマスターしていくことが、どうしても必要になります。
(2)そうでなければ、どこかで分からなくなってしまうたり、できなくなってしまうたりします。
(3)算数や数学のことを考えてみてください。
(4)前にやったことをきちんと理解しておかなくては、次にやることがどうしても理解できない、ということがよくあります。
3. (1)また、必ずしも体系的な学習というわけでもなく、せつかくこれこれのことについて学習するのならば、少なくともこういう点については、大事なこのことに気付いてほしい、分かってほしい、身につけてほしい、ということがあるはずです。
(2)本当は、合科学習とか総合学習の場合であってもそうなのです。
(3)活動そのものは無限定に自由闊達な形で展開していくとしても、指導する側にこれだけはどうしても、という願いや狙いははっきりしていなくては、またそれを実際に達成していくための最小限の手立てが準備されていないと、とても教育とは呼べないでしょう。
4. (1)きちんと「示す」ことができるためには、それなりの準備が必要になります。
(2)特に学習の「表の筋道」と「裏の筋道」とを、教える側ではっきりと掴んでおかななくてはなりません。
5. (1)「表の筋道」というのは、学習を進めていく場合の最も合理的効果的と考えられる筋道のことです。
(2)この教材で何をどういう順番で学んでいけばよいか、ということと言ってもよいでしょう。
(3)このためには、教材の体系のなかでこの教材がどのような位置をもつものかを検討し、その上で具体的な目標群を洗い出して、精選、構造化してみて、そこから子どもにとって最適と考えられる学習順路をはっきりさせる、ということをやらなくてはなりません。
(4)われわれが、単元の目標分析表から目標構造図を作り、その上で指導順路案を書いてみる、という作業をしてきたのも、この「表の筋道」をはっきりと掴むためなのです。

6. (1)これに対して「裏の筋道」をはっきりさせるというのは、学習を進めていく上で子どもが分からなくなりやすい点、考え違いをしやすい点、納得しにくい点、などについて、どうしてそうなるのか、子どもの内面世界の論理をきちんと想定するということです。
- (2)子どもが学習につまずくとしたら、つまずくだけの事情があるのです。「どうしてこんな簡単なことが分からないんだ」と怒鳴ってみてもどうにもなりません。
- (3)本人にもどうして分からないのか分からないのです。だからこそ、教える側で、「こういう考え違いをしているからではないか」「前にやったこういう点を理解していないからではないか」「こういう点にこだわりすぎているからではないか」などという想定を持って、子どもの学習困難を診断し、必要な指導をその時その時に適宜行っていかなくてはならないのです。
7. (1)こうした想定は、当然のことながら、頭の中で考えているだけでは出てきません。
- (2)日常的に資料を収集し蓄積していかなくてはなりません。
- (3)たとえば、テストをした時には、誤答分析をしっかりとやらなくてはならないでしょう。この問題でどういう誤りの類型が見られたか、それぞれの誤答類型は他の問題への解答内容とどのような関係にあるのか、といった分析です。
- (4)また、毎日の授業のなかでも、子どもの「つまずき」を書きとめていくことが必要でしょう。
- (5)特に、教師の問いかけに対し予想もしなかった答えをした場合には、どうしてそういうズレた発言をしたのか、何をどう考え違いをしているのか、などの点について検討してみるとよいでしょう。
8. いずれにせよ、こうした「裏の筋道」については、指導案なり指導計画なりの一番右の欄を「留意事項」として、そこに書いておくのがよいと思います。

P136 ~ 139

[コメント]

「誤答分析」とは何か、その本質に迫る梶田先生の「示す」の御説明をゆっくりと繰り返し読み、その本質に迫りたい。

— 2012年10月29日 林 明夫記 —